

● BATTLE GREEN 最終回 ●

人の折り返し地点に差し加り、自分よりもひと世代上の人々の生き方が気になるようになった。すばらしい学歴がありながらも、引退後は一日中テレビに釘付けで、たまに外出するときは昔からの仲間とゴルフやテニスをするだけ、という人がいる。冬になると暖かいフロリダやアリゾナで日光浴をしながら同じような境遇の仲間としゃべりやランチに時間を費やす人も多いようだ。何の苦勞もないゆったりした生活を羨ましく思えないでもないが、過去の栄光にしがみつくと、ゴルフやテニスだけの生活、テレビや新聞相手の政治談議には魅力を感じない。

その一方で寒いニューイングランドに残り、七十や八十歳の高齢で仕事やボランティアの現役を続けている人もいる。過去の経験を積み重ねているだけあって若い世代が学ぶことは多く、話が興味深く、人間としても魅力的である。

どちらのタイプの高齢者になりたいかと尋ねられたら、もちろん後者である。

どうすればそんな高齢者になれるのだろうか？

私はむかし小説を出版したとき雑誌の取材で「あなたにとって何が幸福か」といった意味の質問をされた。「朝目が覚めるのが待ち遠しくてたまらない仕事があること」と答えたことがある。それと同じようなことを最近口にしたのが後者のタイプの引退者だった。

やマーティンルーサーキング牧師の記念行事などのボランティア、趣味の系図学、そして非営利団体専門のビジネスコンサルタント業で多忙な生活を続けている。大雪が降ると自分の家のドライブウェイだけでなく公共の消火栓まわりの雪かきをする体力もある。

ハーバード大学で工学を学び、レイシオンやNASAにエンジニアとして勤めたマーティンさんは、特に最初のうち職場で唯一のアフリカ系アメリカ人であることが多かった。けれども、職場で差別を感じたこともないし、実力に応じた評価をされてきたと言う。すべてにおいて私に「こうありたい」と感じさせてくれるお手本なのである。

収入のために仕事をしなくても良い状況になったいま、ボランティアにせよコンサルタントの仕事にせよマーティンさんの選択基準は、「Make a difference」なのだそう。

「Make a difference」とは簡単に説明すると社会や個人に何か良い影響を与えることである。自分を取り巻く環境や社会状況で何が欠けている、何かがパフォーマンスではない、と感じることは誰にでもあるだろう。それを変えようとする努力のことである。日本人にはちよつとわかりにくいコンセプトだろう。日本には、社会奉仕をする人に対して「宗教じみていて」、「いい気持ちになりただけの自己満足」という皮肉な見方をする人が多いような気がする。良い気分にはさせてくれることは事実だが、自己満足とも宗教的な奉仕の感覚とも微妙に異なるのが「Make a difference」である。

たとえば、マーティンさんが引退後手がけている企画のひとつに、STEM(Science, Technology,

Engineering and Mathematics) Academyがある。工学の分野では女性、アフリカ系アメリカ人、ラテン系アメリカ人の数は圧倒的に少ない。マーティンさんはここに注目し、これらのグループからのエンジニアが将来増えるように、中学や高校生のうちに工学とはどんなもので、いかに面白いものかを紹介するプログラムとある工科大学との協力のもとに作り上げ、それを近郊の町の公立高校に取り上げてもらって

いる。

マーティンさんの企画のユニークさは、体験に基づいた体系的な協力関係づくりである。彼は、子供の成功には、高校や大学だけでなく、家庭や早期教育、企業、地域など総合的なアプローチが必要だと信じている。だから彼のプログラムには、親、中学校、高校、大学、企業、身近なお手本となるプロのエンジニア、とエンジニア誕生に導く要素がすべて含まれている。つまり、マーティンさんが「良い気分」になることでは終わらない、現実的な結果を狙ったものなのである。

人間は一人では生きてゆけない。どこかで誰かに助けられている。マーティンさんの場合それは大学教育を受け教育熱心だった母であり、「君はエンジニアになってはどうか？」と彼に助言した九年生（こちらの高校一年生）のときの数学の教師であった。この教師がエンジニアという言葉の口にするまで、マーティンさんはそんな職業があるということさえ知らなかった。そしてエンジニアになったマーティンさんが感じたのは、「これほど面白い仕事はない」という感覚だ。遊びのように面白いことを仕事にする、という喜びを体験したマーティンさんだからこそ、後輩たちに少なくとも「選ぶ機会」を与えたいのだ。

土曜日の課外授業を受けたからといってすべての子供がエンジニアになるとはマーティンさんも期待してはいないが、たとえひとりの子供の人生でも改善できればそれは「Make a difference」である。マーティンさんが言うように「自分が生まれてきたことの意味を感じさせてくれる」ことだから「Make a difference」は本人にとっても大切なことなのだ。

「Make a difference」の有名な例はマイクロソフト社の創始者ビル・ゲイツだろう。彼は成功を活かしてビル&メリンダ・ゲイツ財団(Bill & Melinda Gates Foundation, B & MGF)という世界最大の慈善基金団体を作り、現在は全世界の貧困や疫病の撲滅に全力を注ぎ込んでいる。私の身近では、約二十年前に専門医師、看護師、病院、企業を巻き込み、日本に「失禁対策」を打ち立てる偉業を遂げた看護師がいる。

だが、マーティンさんが言うように「Make a difference」はそれぞれにとつて異なる。

友人から仕事をやめて全力投入することを求められて断ったとき、私たちの友情にしばしひびが入った。そのときに友人にきちんと説明できなかったのは、彼女と私の「Make a difference」は違つて当然なのだということだ。

何がそうなのかは実際にいるんことを体験してみないとわからない。

最近、私には新しい「Make a difference」との出会いがあり、毎朝目覚めるのが待ち遠しくてならない。それについてはまたいつかお話ししたいと思う。

これまで長年お付き合いいただき、ありがとうございます。

★プロフィール★

わたなべ ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒業、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
<著者のブログ>
<http://watanabeyukari.weblogs.jp/>

バトルグリーン／連載エッセイ最終回

渡辺 由佳里

Make a difference

